

2

第2章 大学生生活について

第1節 大学生の生活経験と適応意識

山田剛史

大学志望度と満足度

入学以降力を入れてきた活動

大学での適応度

第2節 大学生の生活実態

十河直幸

1週間を通しての通学日数、大学で過ごす時間

大学で過ごす時間の内訳

サークルや部活動への参加状況

アルバイトの実施状況

大学以外での時間の過ごし方

居住形態、通学時間

大学生の1カ月の収入

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

資料編

序章 大学生調査の実施とその活用に向けて

第1章 大学入学までの実態

▶ 第2章 大学生生活について

第3章 大学での学習

第4章 大学卒業後の進路

第5章 大学生の意識

資料編 調査票見本、基礎集計表

第1節 大学生の生活経験と適応意識

大学志望度と満足度

現在の大学・学部に進学したときの気持ちについてたずねたところ、およそ8割の学生は肯定的な気持ちを抱いていることが確認できる。また大学満足度は、「施設・設備」に関するハード面で最も高く(76.0%)、「授業・教育システム」「進路支援の体制」に関するソフト面で最も低い(ともに49.5%)ことが確認された。

Q

- 現在の大学・学部に進学したときの気持ちとして、もっとも近いもの1つをお選びください。
- 現在通っている大学について、どのくらい満足していますか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

現在の大学生は、どのような気持ちで大学に進学したのか(志望度)。また、現在通っている大学について、どのくらい満足しているのか(満足度)。まず志望度について、図2-1-1によると、全体では「ぜひ入りたいと思って進学した」が32.4%、「まあ満足して進学した」が45.7%で、両者を合わせるとおよそ8割の学生は自分の所属大学に対して満足感を持って入学していることになる。性別でみても両者の合計値はほとんど同じだが、「ぜひ入りたいと思って進学した」という意識については男子(29.5%)よりも女子(36.6%)のほうがやや高い。

近年、学生の進学に対する意識が変わってきている。従来であれば第1志望か否かという指標は、ある程度満足度と関連していたが、志望度と満足度が直接つながらない学生も増えてきている。8割近くが肯定的な回答をしているが、特に「まあ満足して進学した」と回答している学生の中には、多様な背景が含まれていることが考えられる。

次に、現在所属している大学に対する満足度を、施設・設備、進路支援の体制、教員、授業・教育システム、大学全般の5つの側面でたずねた。図2-1-2によると、全体では「施設・設備(図書館やインターネットの利用など)」に関する満足度が最も高く(76.0%、「とても満

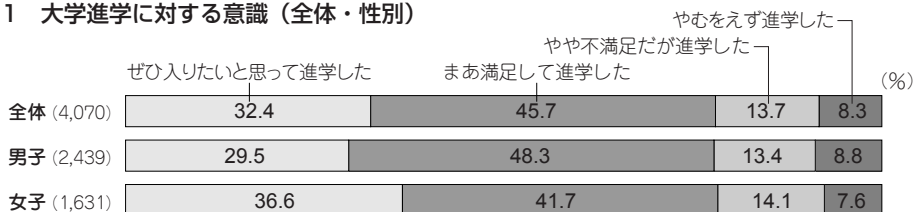
足している」+「まあ満足している」の%、以下同)、次いで「大学全般を総合的に判断して」(64.1%)、「教員(専門性の高さやよい影響を受けるなど)」(53.1%)と続き、「授業・教育システム(教育内容やカリキュラムなど)」(49.5%)と「進路支援の体制(就職セミナーやガイダンスなど)」(49.5%)は同率で並んでいた。特に、ハード面での整備は学生にとって満足のいくものであることが結果からうかがわれる。カリキュラム等の「授業・教育システム」については、目下さまざまな取り組みが展開されているところであり、まだ十分に学生に成果が届いているとはいえない状況である。「進路支援の体制」についても全体では5割を切っているが、実際1・2年生はまだこうした機会を利用する時期になく、図2-1-3の学年別の結果をみると「判断できない」という回答も目立った。さらに3・4年生のみで満足度をみても、3年生54.5%、4年生51.8%(ともに「とても満足している」+「まあ満足している」の%)と5割を超えているが、まだ十分であるとはいえない状況である。

また、表2-1-1は大学満足度を学部系統別にみたものである。全体と比べ5ポイント以上高い項目がみられた学部系統は「教育」のみで、「教員」(教育58.1%>全体53.1%、5.0ポイント差、以下同)と「授業・教育システム」(54.6%>

49.5%、5.1ポイント差)が挙げられる。教育系の学部では、文部科学省が推進する「GP事業*1」の中で、教員養成GPなる教員養成に特化した教育改革が独自に展開されていることなども、こうした数値に表れているものと思われる。一方、全体と比べ5ポイント以上低い項目がみられた

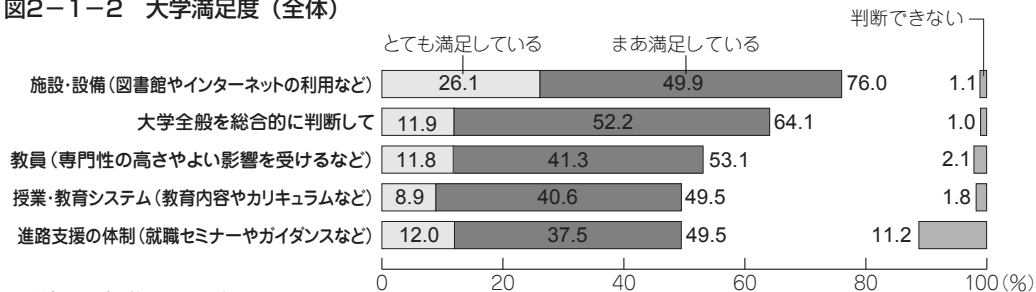
のは「農水産」と「保健その他」で、「施設・設備」(農水産66.4%<全体76.0%、9.6ポイント差；保健その他67.8%<全体76.0%、8.2ポイント差、以下同)と「進路支援の体制」(39.2%<49.5%、10.3ポイント差；36.1%<49.5%、13.4ポイント差)が挙げられる。

図2-1-1 大学進学に対する意識 (全体・性別)



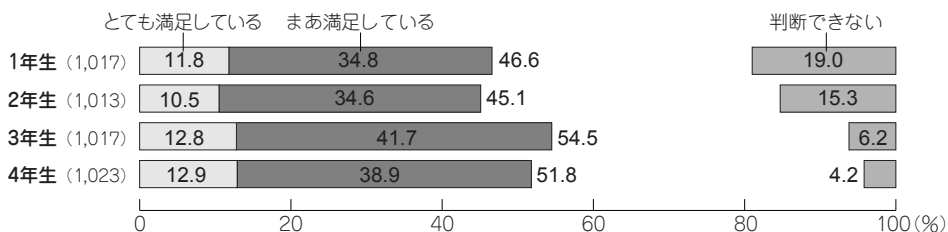
注) ()内はサンプル数。

図2-1-2 大学満足度 (全体)



注) サンプル数は4,070名。

図2-1-3 大学満足度：進路支援の体制 (学年別)



注) ()内はサンプル数。

表2-1-1 大学満足度 (全体・学部系統別)

	全体 (4,070)	人文科学 (837)	社会科学 (1,553)	理工 (980)	農水産 (125)	保健その他 (283)	教育 (143)	その他 (149)
施設・設備 (図書館やインターネットの利用など)	76.0	78.9	77.4	75.6	66.4	67.8	67.2	80.5
進路支援の体制 (就職セミナーやガイダンスなど)	49.5	50.7	52.5	49.0	39.2	36.1	48.3	50.4
教員 (専門性の高さやよい影響を受けるなど)	53.1	56.7	48.7	54.3	57.6	55.1	58.1	57.7
授業・教育システム (教育内容やカリキュラムなど)	49.5	52.5	47.2	51.0	48.0	44.6	54.6	51.7
大学全般を総合的に判断して	64.1	67.1	62.2	64.1	66.4	61.5	67.9	65.8

注1) 学部系統の詳細はp. 6を参照。 注2) 「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

注3) ○は全体よりも5ポイント以上高いものを示す。

注4) —は全体よりも5ポイント以上、=は10ポイント以上低いものを示す。

注5) ()内はサンプル数。

*1 GP事業とは、各大学が自らの大学教育に工夫を凝らした優れた取り組みで他の大学でも参考となるようなものを公募により選定する文部科学省の事業の通称。なお、「GP」とは、大学教育改革の「優れた取り組み」という意味で国際的にも広く使われている「Good Practice」の略称。

入学以降力を入れてきた活動

入学以降どのような活動に力を入れてきたのかについてたずねたところ、「趣味」(67.8%)や「アルバイト」(52.7%)などの正課外活動に力を入れている学生が多くみられた。学部系統別では、「人文科学」の学生は授業中心の概して真面目な学生気質が、「教育」の学生は正課・正課外のあらゆる側面で積極的に活動に取り組んでいる様子がうかがわれた。



あなたは次の項目について、これまでの大学生活の中で、どのくらい力を入れてきましたか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

大学生の間、学生は学業以外にもさまざまな活動に参加する。ここでは、そうした活動のうち代表的な10の項目を挙げ、現代の学生の特徴についてみる。なお、選択肢は「とても力を入れた」から「全く力を入れなかった」までの5段階に「大学生活ではやっていない」を加えてたずねている。図2-1-4によると、最も力を入れてきた比率が高かったのが「趣味」(67.8%、「とても力を入れた」+「まあ力を入れた」の%、以下同)で、次いで「大学の授業」(58.4%)、「アルバイト」(52.7%)と続き、この3項目が5割を超えていた。正課や正課外活動とは異なる趣味の活動が最も高い値を示したことは、近年の学生が個人の私的時間(プライベート)を大切にしていることを物語っている。またその背景として、近年の学生はとても忙しく、そういった忙しさの裏返しとしての結果とも読むことができる。1週間の消費時間という量的側面からたずねている「大学以外での時間の過ごし方」でも、1週間で「3~5時間」以上と回答した比率が「趣味」64.6%、「テレビやDVDなどの視聴」60.5%と、他の項目に比べて高い*1。

また、2番目には大学の授業が挙げられているが、3番目はアルバイトと正課外活動が入っており、授業以外の活動へも積極的に参画していることが確認できる。

「就職活動」(22.5%)や「卒業論文や卒業研究」(17.9%)は全体として力を入れてきた比率は低かったが、これは学年の影響によるもので、表2-1-2で高年次に限ってみると「就職活

動」は3年生25.6%、4年生54.4%、「卒業論文や卒業研究」は4年生で46.7%となっていた。一方、「社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)」は全体で9.7%であり、4年生で13.4%と若干高い値を示すものの全学年を通じて低い結果となっている。

次に、学部系統別にみたものが表2-1-3である。「人文科学」では、「大学の授業」(64.1%>全体58.4%、5.7ポイント差、以下同)、「趣味」(73.2%>67.8%、5.4ポイント差)、「読書(マンガ、雑誌を除く)」(50.7%>40.9%、9.8ポイント差)において全体に比べ5ポイント以上高く、個人の活動を中心とした学生生活に積極的であり、相対的に真面目な学生気質を有していると思われる。

10の活動のうち、半数近い4つの活動で全体に比べ10ポイント以上高い値を示しているのが「教育」である。具体的には、「サークルや部活動」(51.1%>38.9%、12.2ポイント差)、「学校行事やイベント」(31.5%>20.4%、11.1ポイント差)、「アルバイト」(64.4%>52.7%、11.7ポイント差)、「社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)」(31.5%>9.7%、21.8ポイント差)が挙げられる。部活・サークル活動やアルバイトなどの正課外活動、大学行事にかかわる正課外活動が相対的に高く、ボランティア等を含む社会活動においては20ポイント以上と圧倒的な高さを示している。社会活動に関しては、教育学部、特に教員養成系でカリキュラム上ボランティア等の活動が積極的に取り入れられていることな

*1 第2章第2節「大学以外での時間の過ごし方」(p.73、表2-2-14)を参照。

どが影響しているように思われる。それにしても、これらの活動を個人のレベルで遂行するのは相当の負荷がかかると思われるが、ハイパーフォーマーな学生が相対的に多いことをうかがうことができる。

一方、「理工」「農水産」系学部では、「就職活動」（理工16.7%<全体22.5%、5.8ポイント差；農水産14.4%<全体22.5%、8.1ポイント差、以下同）、「読書」（34.7%<40.9%、6.2ポイント差；34.4%<40.9%、6.5ポイント差）、「アルバイト」（47.3%<52.7%、5.4ポイント差；44.0%<52.7%、8.7ポイント差）において全体に比べ5

ポイント以上低い値を示している。特に就職活動については、これらの学部では大学院進学者も多く、学部段階における就職活動への力点が相対的に低いものと思われる。「保健その他」は、「就職活動」「読書」「アルバイト」に加え、「趣味」（60.4%<67.8%、7.4ポイント差）においても全体に比べ5ポイント以上低い値を示している。サークルや部活動には力を注ぐものの、それ以外の正課外活動には消極的であり、正課カリキュラムのタイトさゆえに時間が割けないことも考えられる。

図2-1-4 入学以降力を入れてきた活動（全体）

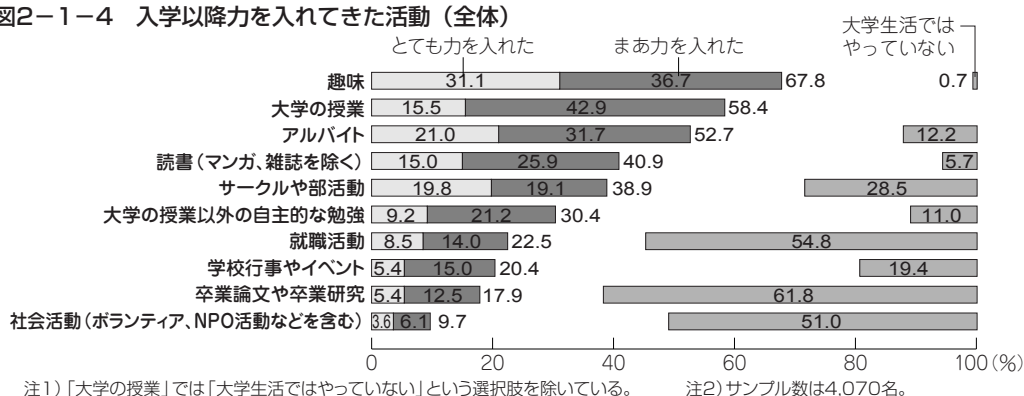


表2-1-2 入学以降力を入れてきた活動（全体・学年別）

	全体 (4,070)	1年生 (1,017)	2年生 (1,013)	3年生 (1,017)	4年生 (1,023)
大学の授業	58.4	60.9	58.9	56.1	57.4
サークルや部活動	38.9	40.5	38.5	37.8	38.7
卒業論文や卒業研究	17.9	3.8	3.9	17.1	46.7
大学の授業以外の自主的な勉強	30.4	25.0	27.7	34.1	34.7
学校行事やイベント	20.4	19.9	19.8	20.6	21.4
アルバイト	52.7	45.6	51.0	53.9	60.2
社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)	9.7	6.6	9.3	9.4	13.4
趣味	67.8	63.8	65.0	68.4	74.0
就職活動	22.5	4.8	4.6	25.6	54.4
読書(マンガ、雑誌を除く)	40.9	40.7	39.2	40.2	43.7

注1) 「ととも力を入れた」+「まあ力を入れた」の%。 注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。
注3) 〃は全体よりも5ポイント以上、〃は10ポイント以上低いものを示す。 注4) ()内はサンプル数。

表2-1-3 入学以降力を入れてきた活動（全体・学部系統別）

	全体 (4,070)	人文科学 (837)	社会科学 (1,553)	理工 (980)	農水産 (125)	保健その他 (283)	教育 (143)	その他 (149)
大学の授業	58.4	64.1	53.5	59.1	59.2	59.0	60.9	68.5
サークルや部活動	38.9	37.9	38.0	36.5	48.8	44.2	51.1	39.5
卒業論文や卒業研究	17.9	20.2	14.3	21.0	19.2	13.1	27.3	22.2
大学の授業以外の自主的な勉強	30.4	30.3	33.1	26.0	27.2	30.4	30.8	34.2
学校行事やイベント	20.4	22.3	19.6	17.7	24.0	23.0	31.5	16.8
アルバイト	52.7	56.4	55.1	47.3	44.0	47.7	64.4	47.7
社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)	9.7	11.8	9.0	6.3	6.4	8.9	31.5	10.7
趣味	67.8	73.2	66.7	66.8	68.8	60.4	67.2	69.2
就職活動	22.5	25.1	27.8	16.7	14.4	11.0	19.6	20.2
読書(マンガ、雑誌を除く)	40.9	50.7	42.0	34.7	34.4	33.6	40.6	36.3

注1) 「ととも力を入れた」+「まあ力を入れた」の%。 注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。
注3) 〃は全体よりも5ポイント以上、〃は10ポイント以上低いものを示す。 注4) ()内はサンプル数。

大学での適応度

大学での適応度を知るために、学内での転学部・転学科や他の大学への編入学・再入学の希望頻度についてたずねたところ、後者については45.7%もの学生が意識して学生生活を送っていることが確認された。適応度と大学志望度との関連は明らかであるが、入試難易度との関連は必ずしも明確ではなかった。負の連鎖を断ち切るうえで、入学前の目的意識の明確化とそれに則した進学準備の必要性が確認された。

Q

- あなたは現在の大学生活の中で、次のように思うことはありますか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。
- 【「よくある」「たまにある」に回答した方にお聞きします】主な理由を簡潔にお書きください。

現在の大学生がどの程度現在の大学に満足・適応しているのかを知るために、学内での転学部・転学科、編入学等他大学への再入学それぞれを希望する頻度をたずねた。図2-1-5によると、転学部・転学科を希望する頻度に関して、「よくある」(9.0%)と「たまにある」(23.4%)を合わせると32.4%で、3割を超える学生が自分の所属する大学の中で学部・学科・コースを変更したいと感じている。次いで、編入学等他大学への再入学を希望する頻度に関しては、「よくある」(17.1%)と「たまにある」(28.6%)を合わせると45.7%で、4割を超える学生、極端に言えば半数近い学生が大学に入り直したいと感じている。特に、「よくある」と回答した学生が転学部・転学科の2倍近くの2割程度存在しており、こうした意識を強く持ちながら学生生活を送ることは、学修面や生活面、精神面などのさまざまな点で問題を生じさせている可能性が考えられる。

図2-1-6は、先述した大学志望度(p.58参照)との関連をみたものである。これによると、「やむをえず進学した」学生の5割以上(54.1%)が他の大学への入り直しを強く意識している。大学への適応は、大学の中で経験することによって規定されるのみならず、入学する時点、もっといえば入学する前の大学に対する意識のあり方によって規定されることがうかがえる。このことは、「大学全入」時代を迎え入学へのハードルが一層下がるなか、きちんとした進路選択を行わないと、大学入学後も不適応意識を持った

まま学生生活を送ることにつながりかねないことを示唆している。

つづいて学生の進学意識という主観的な指標について、所属大学の入試難易度という客観指標によって、適応意識に違いはみられるのかについて検討を行う。図2-1-7によると、偏差値50未満の大学では、5割を超える学生が他の大学への入り直しを希求していることがみてとれる(「よくある」+「たまにある」の合計)。ただし、偏差値65以上の難関大学は別にして、それにつづく入試難易度の大学でも4割を超える学生が同様の意識を持っていることから、単純に難易度の高低だけでは判断できない問題であることも留意しなければならない。

では、大学での適応度を高める要因はどこにあるのか。設問では他の大学への入り直しを希望する理由について自由記述を設けており、「よくある」と回答した学生の自由記述の回答を分析し、表2-1-4のように分類した。なかでも、カテゴリー「1. 入学」に関する記述が多く、入学時の不本意感がおそらく他のカテゴリーにあるような内容と関連づけられて、強固になっている可能性がある。これらは単純に入試難易度に直結するものではないことから、負の連鎖を断ち切って前に進むためには、やはり早い段階から目的意識を明確にして、それに即した進学準備を行うこと、また本意進学がかなわなかった場合も、与えられた環境の中で目的を見出して、具体的に動いていくなどの柔軟性を持つことが必要であろう。

図2-1-5 大学での適応度（全体）

	よくある	たまにある	あまりない	全くない	(%)
同じ大学の他の学部や学科・コースに移りたい	9.0	23.4	22.3	45.2	
他の大学に入り直したい	17.1	28.6	21.4	33.0	

注) サンプル数は4,070名。

図2-1-6 大学志望度と大学適応度（「他の大学に入り直したい」との関連）

	よくある	たまにある	あまりない	全くない	(%)
ぜひ入りたいと思って進学した (1,317)	7.7	19.0	21.8	51.6	
まあ満足して進学した (1,859)	12.5	33.7	25.0	28.8	
やや不満足だが進学した (556)	31.8	37.6	16.5	14.0	
やむをえず進学した (338)	54.1	22.8	8.0	15.1	

注) ()内はサンプル数。

図2-1-7 大学適応度：「他の大学に入り直したい」（入試難易度別）

	よくある	たまにある	あまりない	全くない	(%)
65以上 (552)	8.9	20.1	25.0	46.0	
60以上65未満 (346)	17.1	27.2	23.4	32.4	
55以上60未満 (402)	15.7	27.6	17.4	39.3	
50以上55未満 (483)	15.7	31.9	21.9	30.4	
45以上50未満 (331)	22.7	29.0	19.6	28.7	
45未満 (500)	20.8	29.4	19.4	30.4	

注1) 入試難易度の詳細はp.9を参照。

注2) ()内はサンプル数。

表2-1-4 大学不適応を規定する要因（自由記述分析）

上位カテゴリー	下位カテゴリー	記述内容例
1. 入学	本不意入学、大学ランク	第一志望ではなかった、本当は違う大学に行きたかった、大学のレベルが低い、世間一般の評価が低い
2. 学業・分野	他分野への興味、つまずき	他の分野の勉強がしてみたい、勉強のレベルが高そう
3. 環境・雰囲気	立地条件、雰囲気、経済事情	雰囲気が合わない、設備が整っていない、通学に時間がかかる、地元の大学に選いたい、経済的な理由
4. キャリア	就職、キャリア	就職に不利、卒業しても誇れるものがない
5. その他	情緒、友人関係	面白くない、友達関係がうまくいっていない